

玉生産遺跡 古墳時代に属する玉生産遺跡として、ほぼ確実とみられるのは引野地区にある大師山古墳群が立地する一画である。本市では、弥生時代には碧玉生産が確認されているものの、古墳時代の玉生産については不明であった。わずかに、昭和61年に大師山古墳群の調査終了近くになって、付近の詳細な古墳群分布調査中に、主として瑪瑙や鉄石英と呼ばれる原石が多数散布している事実を把握した。



写106 大師山古墳群採集瑪瑙原石

中筋丘陵の主尾根から、盆地に向かって下降していく2本の枝尾根に挟まれた標高70~90m付近になだらかな谷地形の部分に認められ、幅は最大で100mにも及んでいる。自然公園として造成されたために、残存状況は不詳ながら、すべてが破壊されているとは考えられない。

遺物は、基本的にすべて原石や生産時に生じる剝片で、わずかに須恵器や土師器が認められたが、付近の古墳に伴う可能性もあり、また時期の特定もしにくい。

原石は7.2cm×4.5cmを測る大きな原石もあったが、大半は数mmの無数の剝片や玉として使用できないクズの原石片であった。しかし、生産工程の一部を示す瑪瑙の“粗割り”の状態のものや、石英で擦り切る途中の破片などがあり、ここで玉生産がなされたことは確実である。

大師山古墳群は、先に説明したように6世紀後半以降の竪穴系横口式石室を主体とする古墳群であるが、ここから出土した瑪瑙製勾玉のなかにきわめて稚拙な作りのものが含まれており、調査者たちは“地元産”であろうとの認識をもっている。この大師山古墳群の一画には、こうした勾玉などを作っていた工房や工人たちがいたと考えておきたい。

なお、第3章でふれた碧玉製玉類の生産は、現状では弥生時代に限定されるようで、古墳時代には続いていないようである。

第5章 歴史時代の遺跡と遺物

5.1 あらまし

ここで歴史時代というのは、奈良時代から江戸時代までをその対象としている。本章で扱うのは、奈良時代以降の集落跡（役所跡）・生産遺跡（窯跡）・中世山城址・墓地および主要な採集遺物などで、やはり原則として発掘調査を実施したものを優先的に取り上げた。

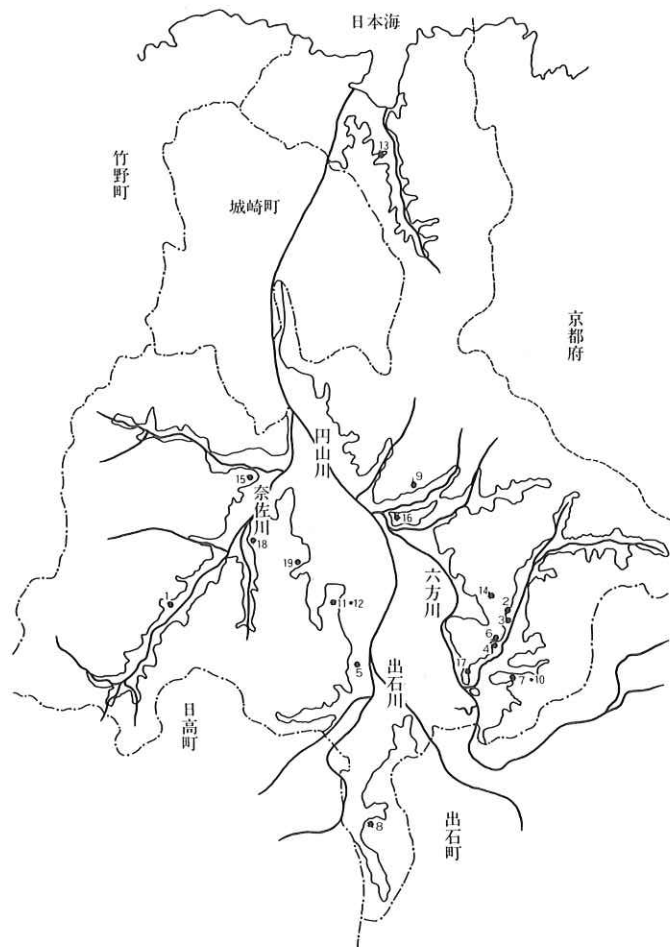
但馬地方という規模でみても、時期幅の長さには比較すると対象としうる資料はあまりにも断片のかつ少数である。それは、今までの考古学的な関心の低さがそのまま反映した姿でもある。最近でこそ、当該時期の考古学的な遺構や遺物を積極的に活用して、歴史像の再構成にまで迫ろうとする試みが各地でなされるようになってきたが、まだまだ不十分な状況である。

市域の研究状況も、おおむね上記したとおりである。山城（砦）の調査は、昭和48年に河谷地区で衣笠山のろし台跡伝承地で、県下で最も早い時期に手がけ、その後も亀ヶ崎城・備後衆山砦・尼城址などで精力的に進めてきた。また、保存のための基礎資料を得るために、江戸時代天保期の磁器窯の調査を昭和54年に実施するなど先進的な部分もある。

しかし、集落遺跡の調査では、女代神社南遺跡・福成寺遺跡・葉琳寺遺跡・エノ田遺跡・中嶋神社周辺遺跡などで一定の成果を上げた程度で、この分野の調査研究は不十分である。また、須恵器窯跡もその所在は知られているものの、分布調査・発掘調査ともほとんど手つかず状態である。

寺院址については、三宅地区所在の著名な葉琳寺遺跡がほぼ確実に存在するものの、実態の究明はほど遠い現状にある。昭和48年と平成3年に宅地化に対処するための確認調査を実施したが、範囲等についてはほとんど成果が得られなかった。

古代・中世墓地については、各地で若干例が確認され調査が進められてきている。経塚は今までに不時発見があるものの、本格的な調査はなされていない。



1	福成寺遺跡	木簡等出土 城崎郡衙の可能性あり	11	妙楽寺経塚	数基の経塚
2	叢琳寺遺跡	白鳳時代の寺院跡か 鴉尾等出土	12	妙楽寺出土仏具	大錫杖頭・六器など出土
3	中嶋神社周辺遺跡	上に付属か 三宅関連の遺構か	13	気比太平寺経塚	青銅製経筒・珠洲焼外容器など
4	香住井走遺跡	三宅関連の遺構か 井戸等検出	14	穴笠山のらし址伝承地	簡単な構造 のろし台の伝承をもつ
5	女代神社南遺跡	平安時代ころの遺跡	15	亀ヶ崎城址	堀立柱建物
6	香住エノ田墓	須恵器蔵骨器をもつ	16	日撫備後衆山寺址	深い堀切 橋かがり遺構
7	立石墓	須恵器・富寿神宝など副葬	17	須恵器蔵骨器(下田山城址)	3間×6間の建物
8	中ノ郷深谷中世墓	火葬場遺構と埋葬施設	18	尼城址	砦遺構と日常生活の場が隣接
9	日撫正福寺谷中世墓	簡単な火葬骨埋葬	19	高屋窯址	天保期に築かれた磁器窯
10	立石中世墓	密集する庶民墓か			

図177 主要な歴史時代遺跡分布図

5.2 福成寺遺跡 福成寺字縄手・前田

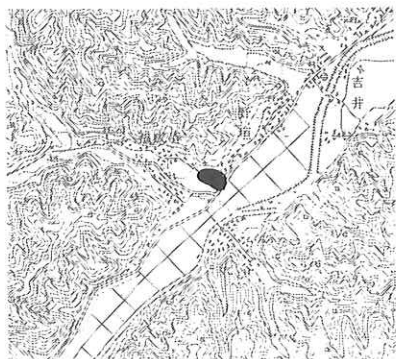


図178 福成寺遺跡位置図

入り込む奈佐谷のほぼ中央に位置している。やや詳細にみていくと、そこからさらに北西に入り込んだ小さな谷のひとつに占地している。いわゆる扇状地形上に、遺跡は立地しているようである。

遺構 調査は、約20か所のテストピットと、その調査成果を勘案して設定したトレンチ8本によって遺構の広がりや遺物の観察をおこなったものである。

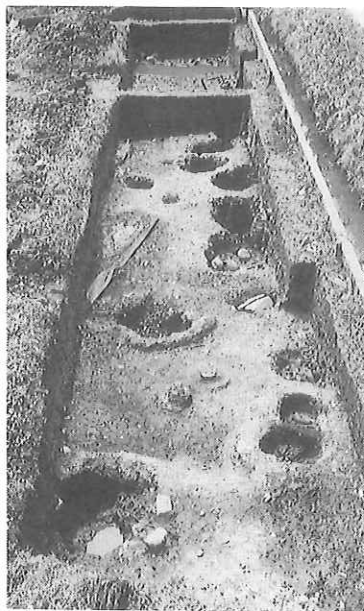
遺構は、基本的には谷部のうちの山裾に多く認められた。広がり、調査範囲のほとんどにわたるものの、主要な部分は東西100m、南北も100m程度の範囲で、地下30cmで遺構面に達するという浅い部分に存在している。

大きく東西2区に分けて説明する。まず西区では地下40~50cmに整地層が認められ、かなり大型の建物が存在していたようである。出土遺物の観

契機 昭和57年度のほ場整備事業に先だって実施した分布調査で、かなり濃密な遺物の分布が認められ、工事に伴う確認調査が国庫補助を得ておこなわれた。

調査は、昭和58年にテストピットと一部トレンチ調査を併用して進めた結果、緑釉等の優秀な遺物が出土した。

立地 遺跡は、市の西部を北北東に



写107 福成寺遺跡調査状況

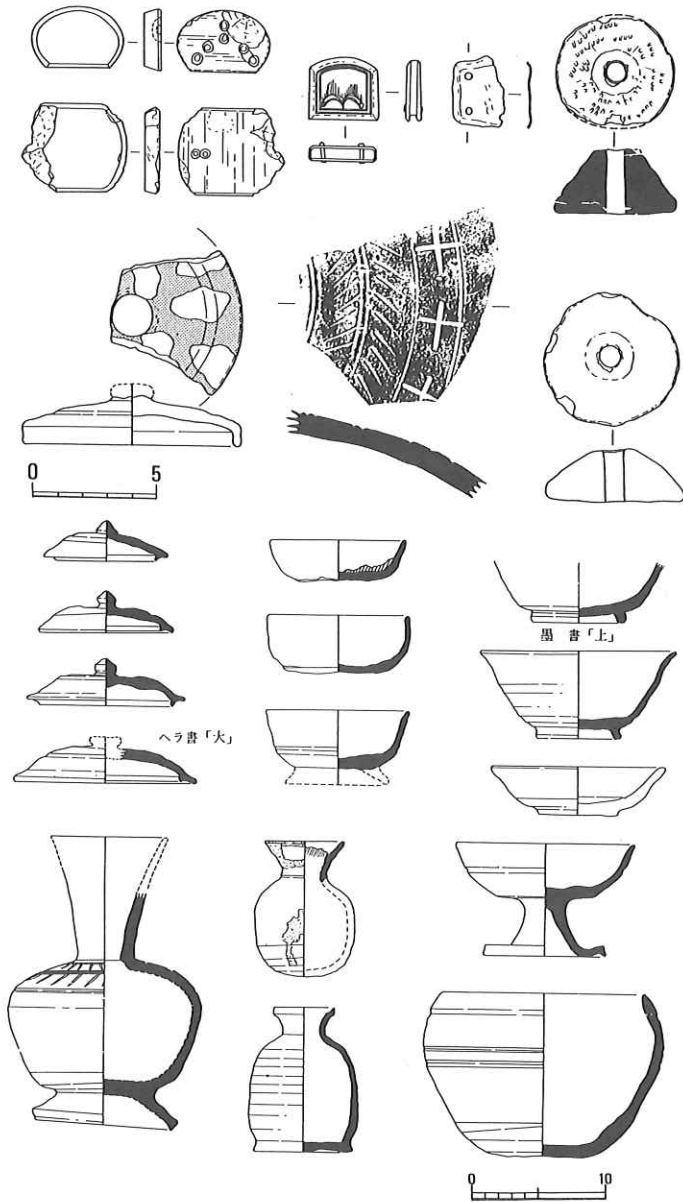


図179 福成寺遺跡の主要な遺物実測図

察から、所属時期はおおむね平安期のものとみられる。また整地前にも7～8世紀ころの建物があった模様で、第1トレンチ下層で本遺跡では古相に属する須恵器が一括出土している。

東地区は、全般的には7～8世紀代の奈良時代前半の遺構が主体で、それに平安期以降の建物跡が一部で重なった状況が確認されている。

遺物 須恵器の古相を示すものでは、7世紀代のまとまった良好な資料が検出されている。当該遺跡成立事情の一端を考えさせる資料である。宝珠形つまみを付し、内面にかえりを有するタイプである。坯蓋には「大」のヘラ書きの文字がみられるものもあった。注意される遺物として、図示したような石帯・陶硯・彩釉陶器類・銅製品・木簡・大量の木製品がある。特に石帯・陶硯・木簡などは遺跡の性格を考えるうえで重要である。

まとめ 遺物や遺構が示すところでは、本遺跡は7世紀代に始まり、奈良・平安の両時代を主体に一部中世にまで至る長期間継続している。

上にみてきたような優秀なこうした遺物の出土は、本遺跡が地方の一般的な集落遺跡とは考えにくく、官衙の可能性を示唆するものである。具体相は不明だが、たとえば郡衙とか里長の館のようなものが候補として指摘できるかも知れない。



図180 福成寺遺跡出土木簡釈文



写108 福成寺遺跡出土陶硯各種
(上) 蹄脚円面硯・(中) 風字硯・
(下) 通常円面硯

5.3 葉琳寺遺跡 三宅字トウヤシキ、など



図181 葉琳寺遺跡位置図

立地 遺跡は、盆地東南部に位置する三開山から南西に向かって派生する山裾の緩傾斜面に立地する。厳密には、河岸段丘上に立地する遺跡とするべきかも知れない。

遺構 簡単な調査は先の確認調査があるが、本格的な全面調査は未実施である。したがって、現状では遺構については確認されていない。

遺物 鷗尾片は、今までに1個体分の各部位が4点が採集されている。復元的に提示された高井悌三郎氏の紹介文によると、

鱗部は段型をなさず、太めの溝をのこして先端弧状の葉形を削り出して並べられ、その外側端面には対角条線・4葉文をいれた方角を押印する。うずだかい縦帯上には単弁7

契機 かねてから軒丸瓦の完形品や鷗尾片の出土、さらには地名とりわけ付近の小字名などから、白鳳時代の遺跡と考えられてきている。また付近の民有地でなされた宅地造成に伴って、事前の確認調査(昭和48年)が実施されたが、注意される遺構や遺物は皆無であった。

その後、市道側溝工事に際して大量の瓦が採集されるなどしている。

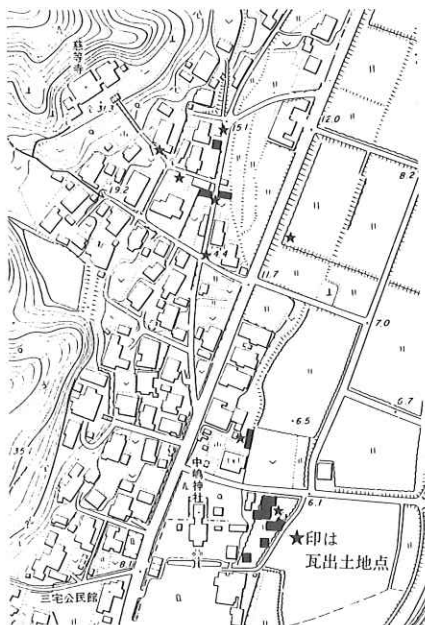
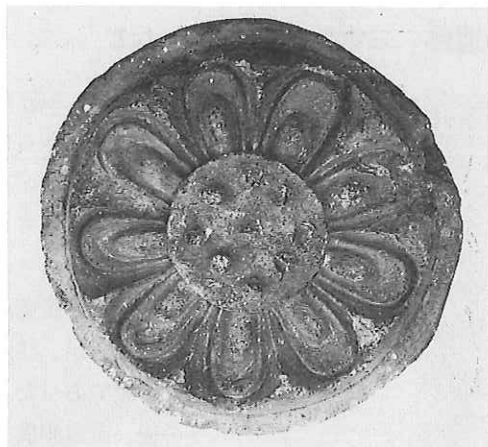


図182 葉琳寺遺跡付近の地形と調査地点



写109 葉琳寺遺跡既発見軒丸瓦（中嶋神社蔵）

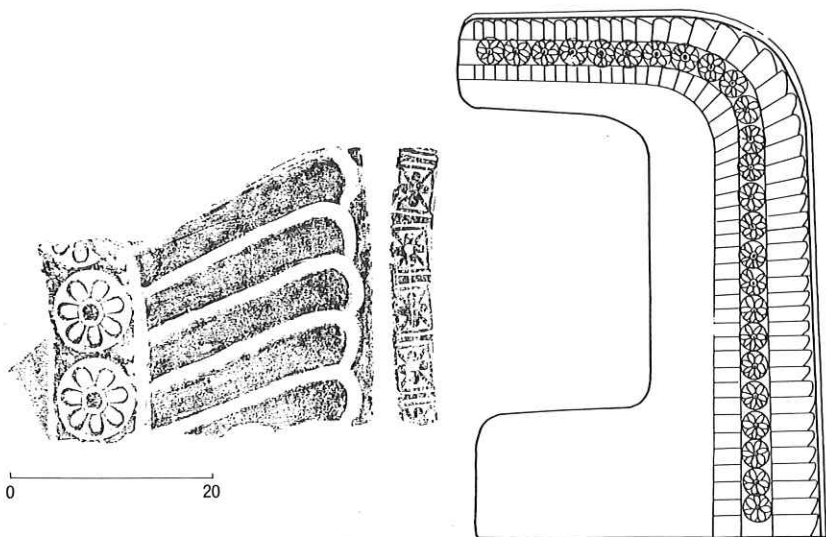


図183 葉琳寺遺跡既発見鷗尾拓影と推定復元図

葉花文を点ずるが、胴部はそのままとする。鱗部の蕨手様、縦帯の花文などは瀬戸内側の岡山寒風窯、香川石井廃寺の系列に属し、この点とくに注意される。

とされている。

なお、この遺物については、上の外側端面には対角条線・4葉文をいれた方角を押印した部分には、ひとつおきに小孔が認められ、いわゆる“拒鵲鷓尾”の類例であることも判明している。拒鵲鷓尾の類例は、難波宮址などにある。

軒丸瓦は、花卉には単弁9葉を配し、中心部には11個の蓮子を置く例で、同範のものが3個出土している。また、これとは別の種類が先の確認調査で出土した。時期的には、いわゆる白鳳期とよばれる奈良時代前期と思われるが、軒平瓦は現状では確認されていない。

まとめ 遺構が確認されていないことを最大の理由として、薬琳寺遺跡の名称を用いているが、本遺跡が寺院址であることは鷓尾等の瓦類の出土や、トウヤシキという字名の存在から疑いのないところであろう。範囲の特定や、伽藍配置の解明など、基本的な作業の推進が望まれる。

なお、最近の京都府丹後地方の調査で、薬琳寺遺跡の軒丸瓦を元型としたと考えられる瓦を焼成した窯跡が調査されている。瓦工人の交流等がかがえ、興味深い。

なお、市教育委員会では、平成3年8月に付近で確認調査を実施している。その成果を簡単に紹介しておく。

第2地点と呼ぶ場所では、表土から約1.5mで粘質の地山に達する。そこで、地山を掘り込んだ幅30～60cmの細い溝が見つかり、その内外から7世紀代の土器が出土した。「薬琳寺」の建立以前のものと考えられる。

さらに、その上の砂質土層からは瓦が多く出土し、8世紀代の土器も見つかっていて、「薬琳寺」の時期のものかと推定できる。

ここでもめざす寺院関連の遺構は見つからなかったが、瓦の残存状態が良好なこと、ここは、以前の市道側溝工事中に大量の瓦が出土した直近の位置であることから、遺跡本体からごく近い場所であることはほぼ確実であろう。

5.4 中嶋神社周辺遺跡 三宅字馬場、など

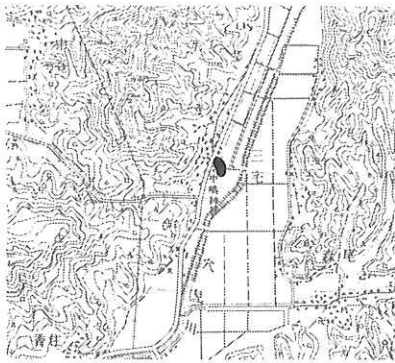


図184 中嶋神社周辺遺跡位置図

契機 かつて、『神美村誌』を編さんする過程で、村内各地を悉皆調査する際に、旧神美農協倉庫（現在吉岡氏所有）やその東側から建物の柱痕のような出土遺物があったことが記されており、注意を喚起している。

市教育委員会では、神美地区のなかでもとりわけ先の「葉琳寺」遺跡やこの中嶋神社周辺の考古学的解明の必要性を痛感して、県教育委員会とも協議して、国と県文化財補助金を得て平成3年度を初年度とする遺跡詳細分布調査を実施してきている。

また平成2年には、「たちばな地区」ほ場整備事業に伴う確認調査を実施し、重要な遺物を得ている。こうした調査成果の一端にふれておく。

立地 三宅地区は、南東向きの中嶋山裾斜面に立地する集落であり、ほどなく斜面は平地に変換する地点付近に延喜式中嶋神社は所在する。遺跡は、神社の北東方向の一角である。

遺構 前節第3調査区から、奈良時代を中心とした時期の掘立柱の建物群や水路が検出されている。建物群は、今後の検討で変わる可能性もあるものの、4棟分が確認できた。いずれも土中に直接木柱を掘り据えたもので、柱の太さは15～20 cm程度と太い。各建物の規模は次のとおりで、1間の長さは1.5～2.1 m程度までである。

- 建物1 東西5間、南北2ないし3間
- 建物2 東西3ないし4間、南北2間
- 建物3 東西3間、南北2間
- 建物4 東西2間以上、南北3間

柱の並びなどから、建物1と建物2は同時に存在していたものと考えられ、両建物の間には柵ないし塀が設けられていたようである。柱穴の切り



図185 中嶋神社周辺遺跡出土
斎串等実測図

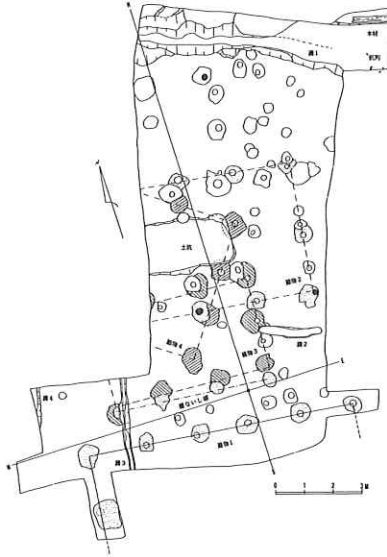


図186 中嶋神社周辺遺跡の検出された遺構

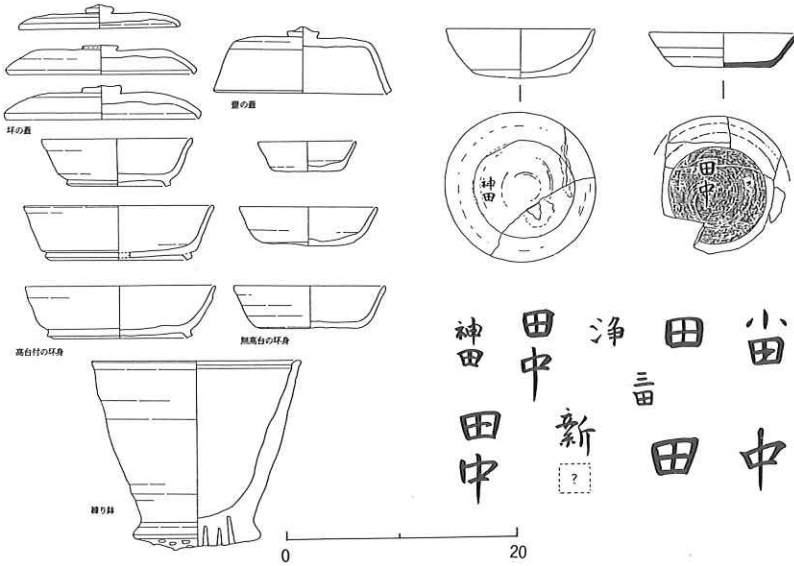


図187 中嶋神社周辺遺跡の出土遺物実測図

合い関係から、建物3と建物4はこれより以前の古い建物である。

さらに建物3と建物4は、その位置からして同時存在は考えられないからやはり新旧の関係があることになろう。

現状では、古い順に建物4－建物3－建物1－建物2とみているが、ほかにも多数の柱穴があるので、さらに棟数や配置は検討する必要がある。

溝1は、調査範囲の北端にそって東西に延びており、東側に下降していく建物群の北側を区画する水路と考えられる。内外から大量の土器をはじめ、木製品や桃の種などが出土した。

遺物 本地点から出土した遺物の種類は、土器類（須恵器・土師器）・カマド・瓦・木製品（齋串など）・自然遺物（種子）・その他（土錘・石器）である。

土器類では、須恵器の坏類・丹塗りの土師器坏類・土師器の甕・なべ類が量的に多く、とくに注目されるのは墨書土器と丹塗り土師器であろう。

墨書土器は、須恵器や土師器の小型器種（坏類）の底部に墨で文字を記しており、20点近く出土した。解読できていないものがあるが、「神田」「三田」「小田」「田中」など、水田にかかわる字が多いのが気にかかる。なお、小刀のようなもので文字を線刻したのものも1点ある。

まとめ 丹塗りの土師器は、日常生活用よりも祭りや儀式などに使用されることが多いとされている。木製品の齋串という律令時代の祓いの儀式に用いられた品もあることから、いずれにしても一般の集落遺跡や住居跡とは考えにくい。

中嶋神社の隣接地点であることや「神田」という墨書文字から、この地点が中嶋神社と関係が深いとの見方も当然可能である。さらに、出土量はすくないものの、瓦片を積極的に評価すれば、いわゆる薬琳寺の関連施設にあてることが可能性としては残る。

さらに、田地に関わる墨書文字や律令的な祓いの遺物を重視すれば、土地管理にかかわる機能という点から「ミヤケ」（三宅・屯倉など）とのつながりや安美郷あなみの役所的な建物群を想定することもできよう。

いずれにせよ、遺跡の範囲や性格解明にはまだほど遠く、今後の調査の進展が期待される。

5.5 香住井走遺跡 香住字エノ田

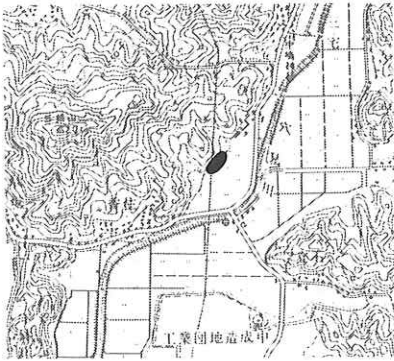


図188 香住井走遺跡位置図

契機 すでに、別の遺跡の説明で何度かふれているように、住宅団地造成等にかかわって、確認調査を実施したものである。さらに、基盤整備事業に関連して、水路部分のみの調査を実施している。

立地 VI区と呼ぶ地点は、尾根下方の水田で、基盤整備工事で排水路と道路敷となる計画のところである。

確認調査を実施したところ、奈良時代から平安時代の土器・木製品が出土し、円面硯の破片なども含んでいたことから、範囲を広げて調査することとした。その結果、掘立柱建物群(図ではSBと表現)や井戸を検出した。

遺構 建物1は3間×2間の建物で、桁行主軸を北東-南西においている。柱穴は円形に掘り込み、径60~100cmである。柱根を良く遺存したものが

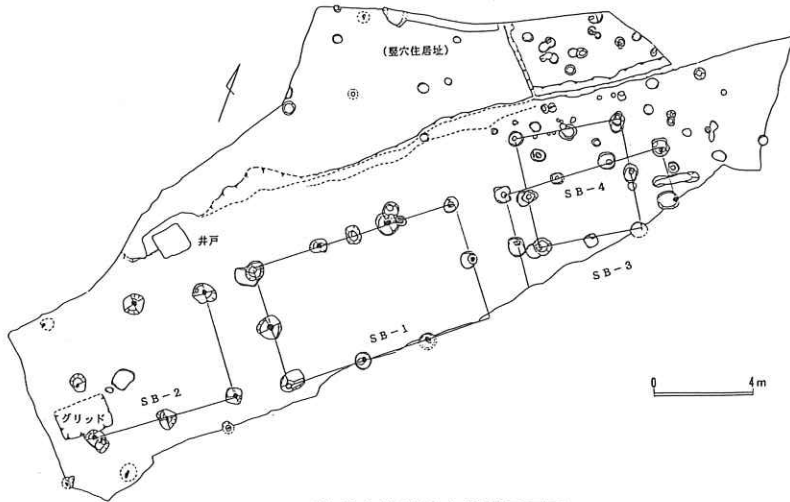


図189 香住井走遺跡検出遺構平面図

7穴あり、その径は20~30 cm、平均して25~26 cmの比較的太い柱を用いている。柱間はほぼ280 cmの等間とみられる。

建物2は建物1の南西に隣接し、一連の建物となる可能性がある。

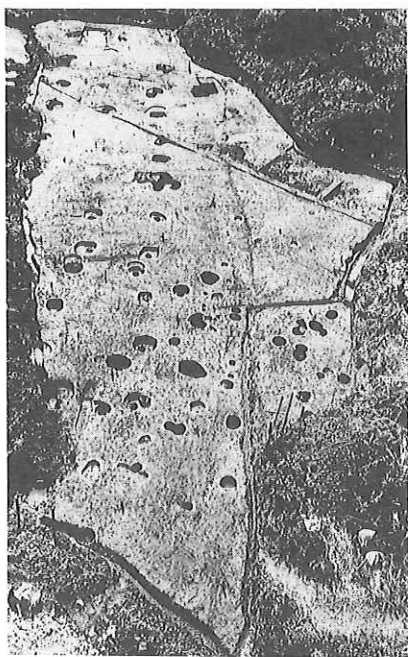
建物3は、建物1の北西に隣接している。桁行3間・梁行2間以上の建物で、同様の主軸をもつ。柱間は、ほぼ桁行225 cm・梁行210 cmである。柱穴は不整形な隅丸方形が多く、一辺50~80 cmである。遺存していた3本の柱根により、柱径は21~24 cmの規模であることがわかる。なお、北桁行の1穴には土師器皿2点とその上に径15 cmの石が入れられていた。

建物4は、建物3と重複した2間×2間の建物である。建物1・2とはやや主軸を異にする。柱間は、ほぼ桁行210 cm・梁行225 cmとみられる。柱穴は不整円形が多く、径50~70 cmである。柱の径は、ほぼ20 cm程度であろう。南端の柱穴には10 cm×20 cmの石が入れられていた。

そのほか南西隅には、やや柱の細い小型の別の建物の一部がかかっており、建物1・2・3などと同様の方向に主軸をもつようである。

井戸遺構は、建物2の北側で検出された。地山を掘り込み、一辺約1.2 m・深さ1.6 mの方形の堀形を設けている。この堀形の辺は建物1などと同様の方向軸で、両者の密接な関連が推定できる。

井戸は、まず坑底に10 cm×30 cmの石を砂礫とともに厚さ40~50 cmまで入れて、壁に接して並べた縦板を固定している。縦板は幅10~20 cm・厚み1.5~2 cmで、部分的には二重に並べている。横木に相当するものは、3 cm~4



写110 香住井走遺跡検出遺構全景

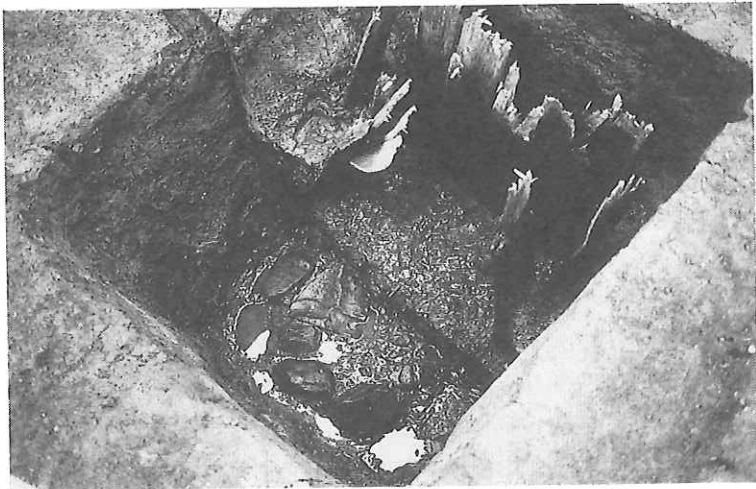
cm角の角材で長さ75cmほどの材が出土しているが、その取り付く位置や手法については不詳である。

また堀形南東辺の上半部にそって、青味白色の粘土が壁と縦板との間に詰められており、その粘土の上には10~30cmの石が乱雑に検出された。石材は肩から約60cm付近まで落ち込んでいた。おそらく、井戸の肩部分を補強する目的で置かれていた石であろう。

遺物 井戸の内部からは盤状木製品のほか、比較的多量の土師器・須恵器が検出された。「西」と読める墨書を底部に記した内面黒色の土師器坏・緑釉の破片なども含まれている。

まとめ 以上述べてきた掘立柱建物群の時期については、出土遺物が奈良時代から平安時代にわたっているので、今後の柱穴内の遺物の検討や、測定を依頼している柱根の年輪年代測定の結果をもとに限定していきたいと考える。したがって、現状では遺跡の時期は奈良~平安時代と幅があり、建物群の存続期間と並行していることが推定できる。

遺跡の性格は、先に説明した中嶋神社周辺の遺跡などと一体的に理解することが必要で、「ミヤケ」とのつながり、穴見郷の役所的な建物群を想定すべきであろう。



写111 香住井走遺跡井戸遺構木柱と底の状況

5.6 女代神社南遺跡 九日市上町字遠ノ下、ほか

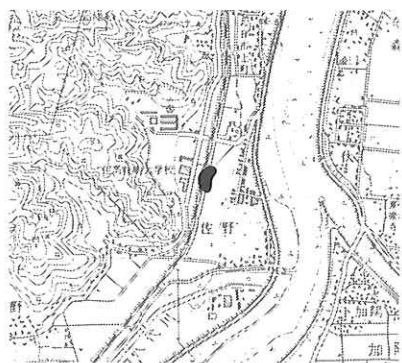


図190 女代神社南遺跡位置図

契機 調査は、県立但馬技術大学校の新設に伴って、県教育委員会が昭和56年11月に範囲確認調査をおこなった。調査地の北側には、弥生時代の代表的遺跡である女代神社遺跡が所在するために、遺跡の南への拡大を想定して実施したものである。

立地 遺跡は、盆地の西を縁取る丘陵状地形が平地に変換してすぐの位置に占地している。厳密な観察では

ないが、円山川の流路によって東側に形成された自然堤防から后背湿地へと移るあたりに立地する低地の遺跡である。

遺構 市道をはさんだ東西に試掘溝が設定された。西側からはほとんど遺物が出土せず、湿地であることが判明している。また、東側では、表土下0.7~1.2 mの黒褐色砂質土層で遺構が検出されている。No. 4とした調査グリッドでは、一部ではあるが、建物遺構が検出された。

またNo. 16グリッドでは、3面の遺構面が確認されており、本遺跡で長い間、人々の生活があったことを示している。いずれの遺構も、出土した遺物からみて平安時代に属するものであった。

遺物 多量の須恵器・土師器のほかに、灰釉陶器・丹塗土師器・土鍋・竈などが出土しており、また、弥生土器や古墳時代土師器などが同一土層で検出されている。

まとめ 以上、簡単に述べてきたように女代神社南遺跡は、比較的低湿地に立地する弥生時代の遺構面を削平して整地された平安期を主体とする遺跡である。灰釉陶器や丹塗土器の存在から、一般庶民の集落とするより、地域の有力者層の住居と理解しておきたい。

山陰本線東側の隣接地の確認調査でも同様の所見が得られ、女代神社遺跡・同南遺跡がその辺りまでは延びていることが判明した。

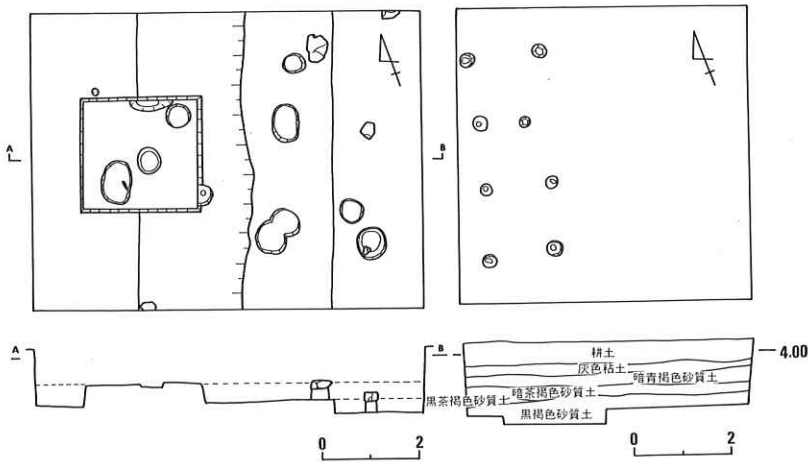
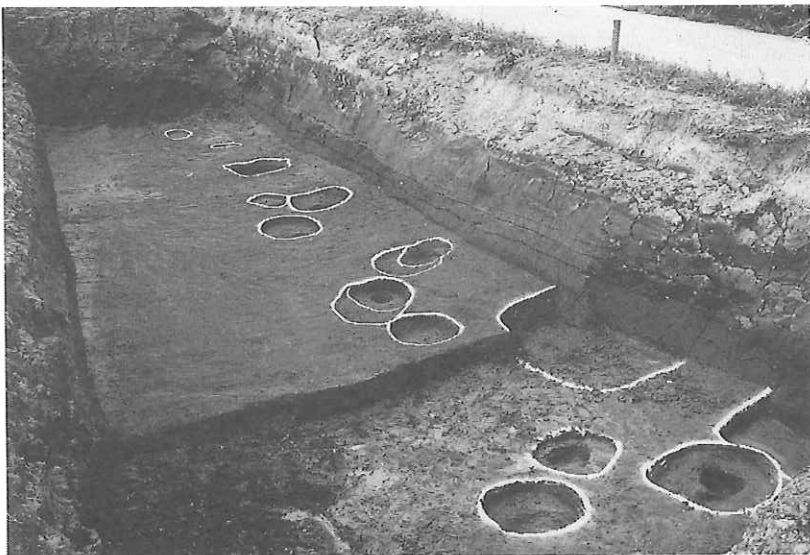


図191 女代神社南遺跡検出遺構平面実測図(右No. 4, 左No. 16グリッドの状況)



写112 女代神社南遺跡の建物遺構

5.7 香住エノ田墓 香住字エノ田



図192 香住エノ田墓位置図

契機 すでに、別の章でふれたので再論しない。

立地 本施設は、第3章で述べたエノ田1号墳の溝内の北西斜面部に造られている。

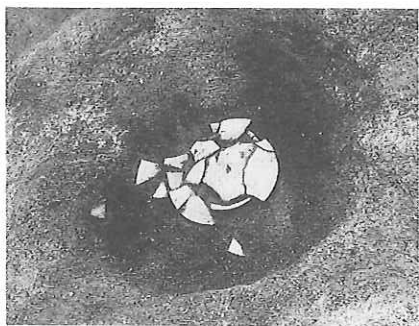
遺構 本遺構は、1号墳の墳丘裾や溝内の北西斜面部を精査している途中に確認されたものである。

溝の南向き斜面に0.75 m×0.83 mの不整円形の土壙を掘り込み、蔵

骨器と考えられる高台のつく須恵器杯の身と蓋をセットとして正位におさめている。土壙を掘り込むまでに、ある程度斜面をカットしており、高い側では地山から掘り込んでいる。深さ約0.2 mの壙内は木炭を多く含んだ土が12~13 cm入れられており、その上は黒褐色土で埋められている。

杯は壙底から3~4 cm上に置かれていたが、土圧のためか身・蓋とも割れており、精査したが内部には骨片そのほかの遺物は認められなかった。壙内の埋土についても同様の状況であった。なお、杯蓋のつまみは欠失しており、葬送に伴う意識的な儀礼行為によるものと考えられる。

遺物 蔵骨器と考えられる高台のつく須恵器杯を身・蓋をセットして正位



写113 香住エノ田火葬墓土壙と須恵器出土状況

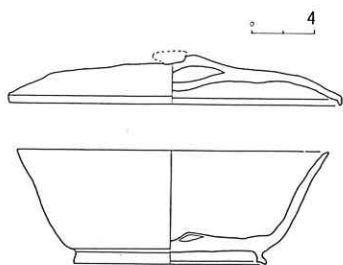


図193 同蔵骨器実測図

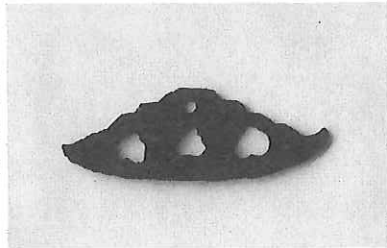
におさめているのみで、その他の遺物の出土は皆無であった。

まとめ 環の形態から、火葬墓の時期は8世紀の中ごろと考えられる。火葬墓周辺には同時期頃の土師器・須恵器片が散布しており、なんらかの関連があるのであろう。

付近の神美小学校には、校内で発見された同時期の須恵器壺を利用した蔵骨器が保管されており、律令時代の地方有力者層の墓地のあり方の一端がうかがえて興味深い。

その他 本遺跡群からは、これとは別に中世に属するとみられる墓遺構が一、二みつまっているのでここで簡単に紹介しておく。

まず、ひとつは第3章で述べたエノ田5号墳の墳丘の北東部分の溝内に造られていた。遺構は、北側をすでに削ってしまった状態で確認したため、土壌の本来の規模は不明確である。復元値での規模は1.05 m×0.85 mの長円形を呈しており、深さは0.2 mほどが検出できた。墳底はほぼ水平であった。



写114 香住エノ田中世墓出土火打ち金

遺物は、いわゆる灯明皿である土師質小皿が1点と、これに接して山形の火打ち金の完形品1点が出土した。火打ち金は幅8.5 cm・高さ3.5 cm・厚み0.3 cmで、頂部に紐穴が穿たれており、本体には透しが3穴認められる。透しの文様は判然としない。

本土墳墓の時期は、鎌倉時代ころかと考えられる。火打ち金は、遺物としては比較的珍しいものである。透しの存在が、平安期の末ころから鎌倉期に限定的にみられるため、そのように考えておきたい。

一方、隣接する門谷横穴墓群の調査中にも、備前焼とおぼしき陶器を長円形の墳を掘って正位に置いた蔵骨器らしい遺物が見つまっている。壺の中に、子供のにぎりこぶし大の礫8個が入っていた。壺の大きさは、高さ33.5 cm・最大径25 cm程度で、古備前焼と推定している。内部に人骨を確認したわけではないが、墓遺構の一種とみておきたい。

5.8 立石 103 号地点墓 立石字ヒヂグチ

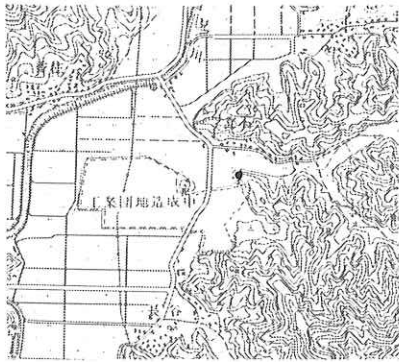


図194 立石103号地点墓位置図

契機 本調査は、一連の中核工業団地の造成にかかるもので、第2章で詳述したとおりである。

立地 立地も上に述べたとおりである。立石 103 号地点の弥生終末期の墓地と重なって存在した。

遺構 上の事情のため、その検出はかならずしも良好な状態ではないが、不明瞭な土色の変化で判断した。

本遺構は、富寿神宝の出土によって平安時代の墓であることが判明している例である。第7・9主体と近接して検出されたもので、確認上面の状況はかなり判断のしにくいものであった。長径 1.1 m・短径 0.4 m 程度の土色の差がみえたが、実際には不十分なため遺構としての確認はできなかった。

このように、かならずしも上面の規模は正確ではなかったが、一部復元値で表現すれば、長径 1.5 m・短径 0.55 m×0.6 m あまりの長円径の土壇であることがわかる。この土壇内に、木棺が埋納されていたような形跡は認められなかった。なお、土壇の深さについては 0.25 m あまりであった。

遺物は、須恵器が 2 点と富寿神宝 2 点が検出されている。東西方向の墓壇の中央やや西よりの所から富寿神宝が、また南よりの部分から須恵器が出土した。まず富寿神宝については 2 枚が相接して検出されており、互いに裏面を接して、上のは文字面を上にしてやや傾斜をもっていた。

また、須恵器については、短頸壺と瓶子がいずれも倒れたり、ほとんど反転した状態で出土しており、原位置をやや動いているものと思われ、また銅銭 2 枚の検出レベルと 4~5 cm 上方にあるため、ことによると遺体の上なり横に置かれていた可能性が指摘される。

遺物 富寿神宝は径 2.3 cm で、一段高い周縁部が幅 1.5 mm で回る。また裏面も同様である。中央には四角の孔があり、その大きさは一辺 5~6 mm

程度を測る。

須恵器壺は、当初より口縁部の上端を欠いていた。復元器高約10cm・残存高8.8cmで、最大腹径8.7cmを測る。肩部には2条の沈線が完周し、また腹部はやや太いそれが1条めぐっている。ヘラ切りで仕上げた底部に高台を付し、その後ロクロナデを施している。高台着地部の径は4.9cmを測る。焼成は良好、堅緻で、胎土は密である。淡い灰色を呈し、肩部にうすく灰を受けている。

壺は、短頸壺の形式を踏襲するものであろうか。口径は5.4cm、器高4.5cm、最大径は腹部で9.5cmを測る。焼成は良好で堅緻、胎土も密。灰色を呈し、肩部と底部内面に灰を受けている。底部はヘラ切りで仕上げ、平坦に作る。

まとめ これらの遺物によって、本遺構の時期はおおむね特定される。すなわち、富寿神宝初鑄の年は818年であり、須恵器の形態も平安京や長岡京出土の当該時期のものと同様であり、矛盾はない。したがって、平安時代初期の墓と考えられる。

具体的に被葬者の層を明らかにすることはできないが、付近でやや力をたくわえてきた郡役人、もしくはその一族程度の墓であろうか。

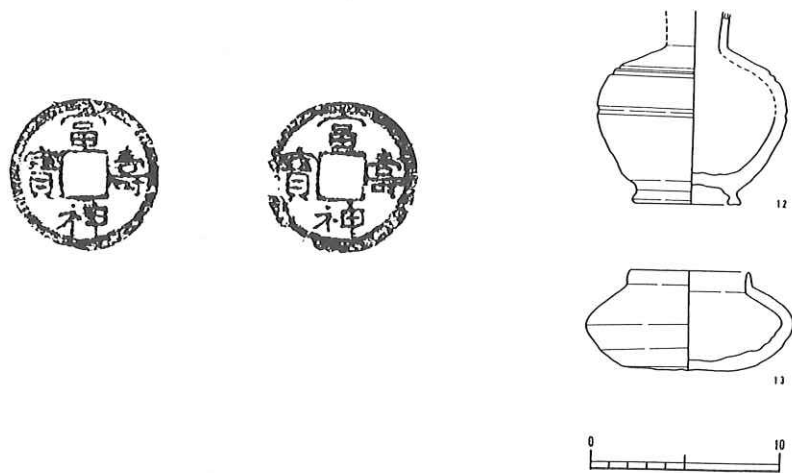


図195 立石103号地点墓の遺物実測図

5.9 中ノ郷深谷中世墓 中郷字深谷

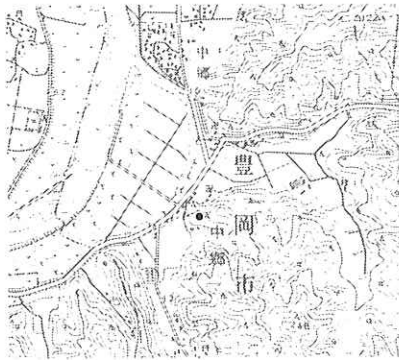


図196 中ノ郷深谷中世墓位置図

契機 本遺跡の調査は、第2章で説明したとおりである。すぐれた石棺の調査のみにとどまらず、その下層からの弥生時代竪穴住址の検出、また上層からの本遺構の検出など興味深い内容であった。昭和58年に実施。
立地 第2章で述べたとおりで、ここでは詳論はしないが、古墳の墳丘を再利用した施設で、ほとんど地下の遺構を損傷することなく営まれて

いた。

遺構 古墳の調査に先だって、表土下に散乱していた河原石の集積が確認されていたため、当該遺跡を古墳の上に造営された経塚もしくは中世墳墓と位置づけて対処していくこととし、まず集石範囲を重点的に調査することとした。

この墓遺構は、全面的な調査によって下部遺構として「火葬場」遺構をもっていることが明らかとなった。したがって、検出順とは逆に説明を加える。



写115 中ノ郷深谷中世墓火葬場遺構

まず、周囲に南北 2.1 m・東西 2.1 m の範囲で北側が開いた馬蹄形を呈する幅 40 cm 前後の粘土の帯がめぐらされ、その内部に南北 2.1 m・東西 1.2 m・深さ 20 cm あまりの舟底形土壇が設けられ、壇壁は 10 cm 以上が焼けて赤変していた。状況からは、「火葬場」遺構との推定が妥当で、北側の壇壁に接して土師器灯明皿が 4 枚検出された。

本遺構の上に、若干の埋土などがなされた後に、上面で南北 0.83 m、東西で 0.62 m、深さ 25 cm 程度の墓壇を穿ち、そこに山石 4 個を使用して小石室が造られており、蓋石は検出当初より存在していなかった。

内部にはわずかな骨片があり、木製蔵骨器があったものか、もしくは木蓋を施した小石室に火葬骨を直接埋納した例かと思われる。

この埋葬施設は、上層に南北 5 m、東西 5.4 m のやや不整形な円形を呈しており、高さは 30 cm あまりを計測した。河原石と一部は土から構成されており、所々に大きな石の集りがみられ、すくなくとも中央の中心埋葬と南裾部の埋葬、北西部の埋葬があったものと推察される。

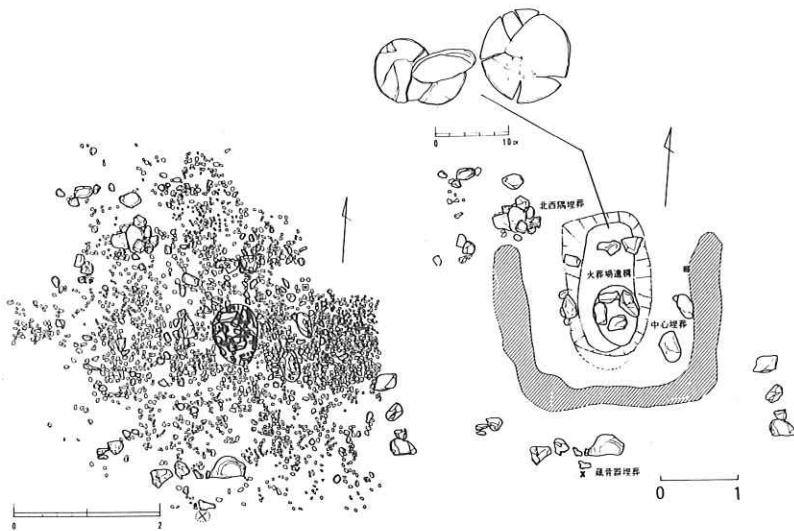


図197 中ノ郷深谷中世墓検出遺構平面図 (左のトーン部分が右の中央に一致)

遺物 「火葬場」遺構に伴うものとして、口径8 cm 前後の土師器灯明皿が3枚と、やや大きな11 cm 程度のもの1枚がある。

また、火葬骨を蔵骨したとみられる須恵器甕は、器高35.4 cm のものと42.8 cm のものがあり、これとは別に蓋を構成していたと思われる須恵器片口も出土している。片口は、器高9.5 cm ・口径25.8 cm である。須恵器はいわゆる東播系と概括される種類のもので、現状ではその方面からの搬入品であろうと考えている。

まとめ 遺物からすれば、おおむね平安期から鎌倉期にかけての遺跡であろう。特殊な遺構として、馬蹄形にめぐる粘土帯は注意しておきたい遺構である。

墓には集石が円形ないし方形にめぐっていたものの、そのさらに上部構造については不明であった。地主の言のように、宝篋印塔もしくは五輪塔の類があったとすれば、時期的にはさらに下降するのであろう。

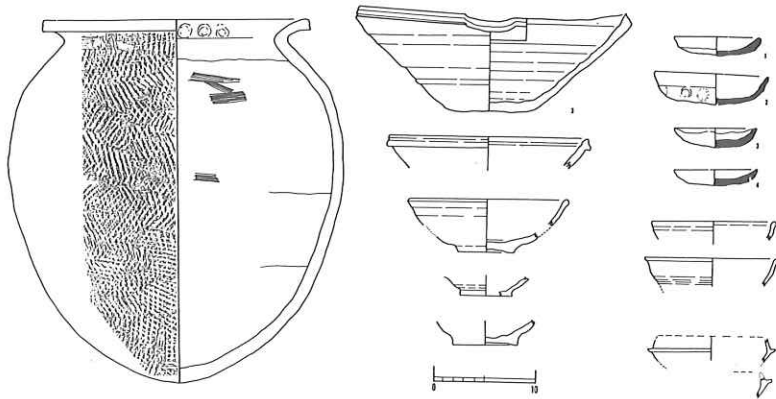


図198 中ノ郷深谷中世墓出土遺物実測図

5.10 日撫正福寺谷中世墓 日撫字正福寺谷



図199 日撫正福寺谷中世墓位置図

契機 正福寺谷横穴墓群のところ
で詳述したように、民間の土取り工
事に伴う発掘調査中に確認し、緊
急に調査を実施したものである。

立地 国道178号線にそって南に
下降してきた枝尾根上に立地する
遺跡であるが、調査着手時には
ほとんど地形の変化は認められな
かったが、わずかな平坦部が造成
されていたかも知れない。

遺構 中世墓は、山裾から11mの
高さに造られていた。本来主体部
の上に置かれていたであろう五輪
塔の一部は、残念ながら重機で確
認する際に動いてしまった。遺構
は、尾根稜線を削り小さなテラス
を造った後に、尾根に直交して主
体部を掘り込んでいる。長辺方向
1.5m・短辺方向0.46mの楕円
形で底は舟底状を呈し、深さは30
cmである。

遺物 墓壙内の上層の黒灰色土中
には、少量の骨片が含まれていた。
他に遺物は出土しなかった。

まとめ 五輪塔は水輪・地輪のみ
が出土したが、他は所在不明であ
った。どうした階層の人物の墓か
不明である。



写116 日撫正福寺谷中世墓遺構土壌検出状況

5.11 立石中世墓 立石字ヒヂグチ

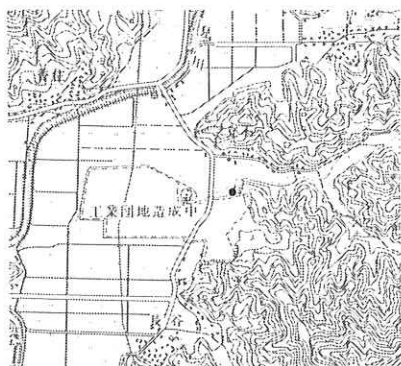


図200 立石中世墓位置図

契機 豊岡中核工業団地の造成工事に関連して、墓地の移転が計画されたために調査を実施した。昭和58年の実施である。

立地 立石古墳群が所在する丘陵の突端近くに位置し、そこから北東方向に下降する小枝脈の最先端にいくつかの墓群から構成されている。

遺構 本墳墓群の調査は、弥生時代末ころの集団墓を調査中に検出した

もので、一部でそれらと重なっていたために検出が困難な部分もあった。東西 82 m・南北 85 m の範囲内に11基が4グループ程度に分かれて検出さ

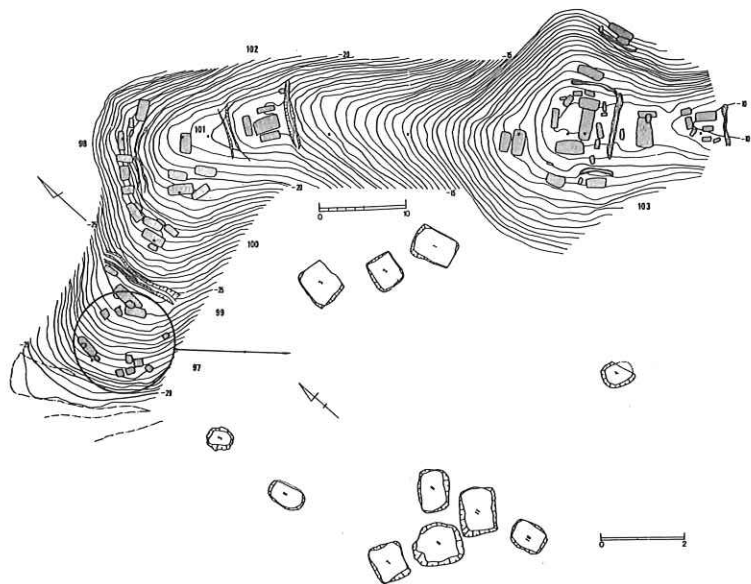


図201 立石中世墓付近の地形と墓壙検出状況

れている。

一例を紹介すると、1は南北1.05m・東西0.75m・深さ0.43mの規模でほぼ垂直に近く掘り込まれている。この墓壇底に北側から東側にかけて有機質の変化が認められ、おそらく北に頭位を置き、右側臥屈葬の姿で埋納された痕跡と理解された。

遺物 土師質土器は、一部に黒変した部分をもつものがあり、灯明皿として利用していたことも考えられる。大きさは、最大で径14.1cm、小さいものでは9cm前後を測る。釘はおおむね全長5.5cm程度で、下端を曲げたものが多い。当然、棺の組み立てに用いたものであろう。銅銭が若干出土している。開元通宝は、直径2.3cmを測る。祥符元宝は直径2.3cmを測る。一部を欠く。

まとめ 当地方での土師質土器編年が不十分なため、時期はとりあえず中・近世ということで紹介しておく。

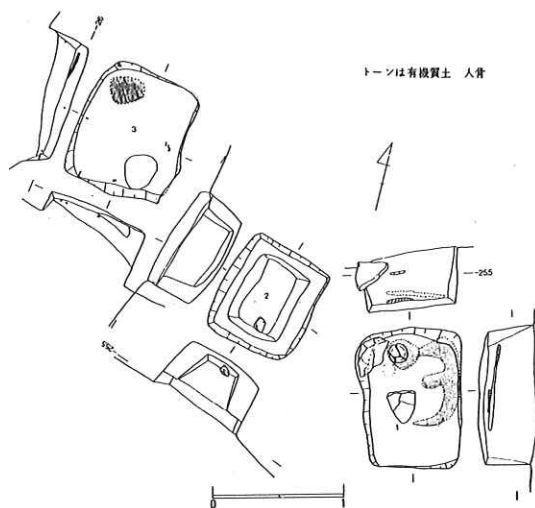


図202 立石中世墓第1・2・3主体実測図

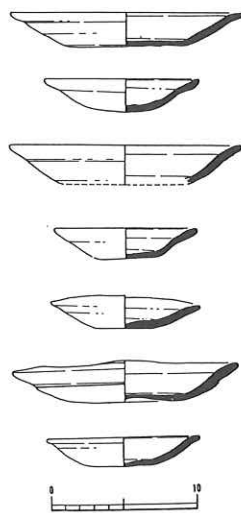


図203 立石中世墓出土遺物実測図

5.12 妙楽寺経塚 妙楽寺字見手山

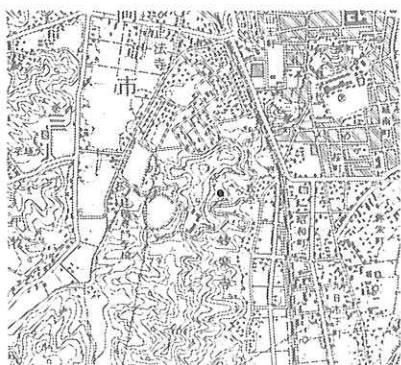


図204 妙楽寺経塚位置図

契機 昭和30年に豊岡北中学校の生徒が偶然の機会にみつけ、また昭和33年には妙楽寺が裏山に散策ならびに参道を整備する工事中に不時発見したものである。

立地 種々の記録や証言を元に検証すると、大略南北に10m、東西に2~3mの範囲に集中して認められたようで、その数は5基以上にのぼる模様である。

これらは、妙楽寺の丘陵のひとつが東に派出した部分に立地するもので、寺の建物の北側にあたる位置である。

遺構 発見当時の記録は、豊岡市が保管する公文書に掲載されており、見取図が付されている。簡単な計測などがなされたのであろう。

昭和33年の発見にかかるもののみ、その構造が判明する。すなわち、最初に1基(D)、続けて別の日に2基の計3基が確認されており、図やメモが残されている。それによると以下のとおりである。

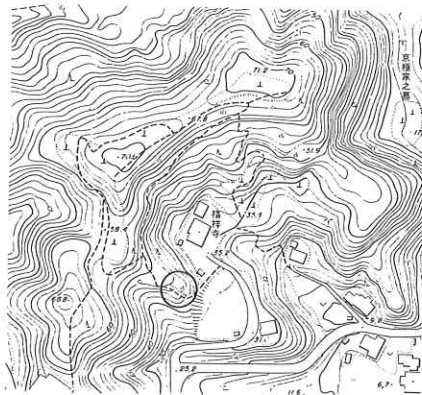
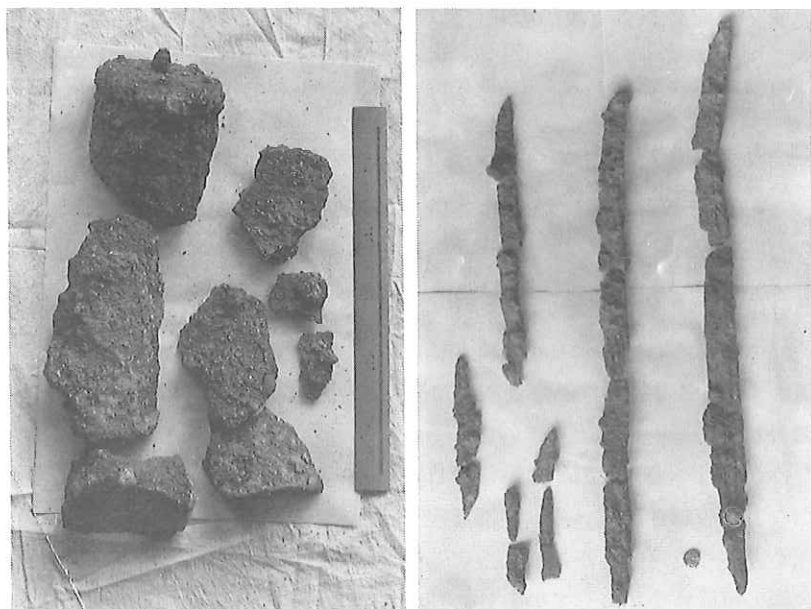


図205 妙楽寺経塚遺跡の立地と略図



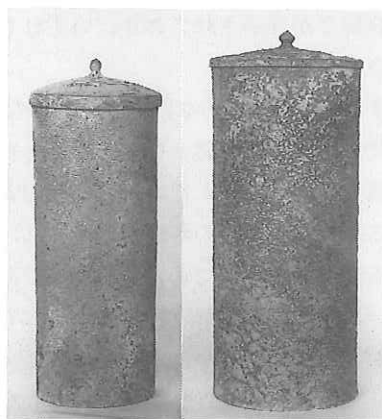
写117 妙楽寺経塚検出の小石室
(発見当時)



写118 妙楽寺経塚で発見当時の鉄製経筒と刀子



写119 妙楽寺経塚須恵質経筒外容器



写120 妙楽寺経塚青銅製経筒2種

まず経塚Cは、4枚の板石ならびに丸い石1枚によって小石室を構成し、3枚の蓋石をかぶせている。36～48 cm程度の広さで、深さは30 cmあまりを測る。底にも板石があったようである。なお、外部構造についてはメモ等に記載がない。

経塚Bは、48 cm×60 cm程度の広さをもつ小石室が、底に1枚、周りに4枚の板石で構成されており、さらに蓋石として2ないし3枚の板石が置かれていた。

経塚Aの規模は記載がないが、底に2枚、周囲は3枚の板石と2個のやや厚さのある石でやはり小石室が構成されていた。蓋石は1枚であった。遺物 これら3基の小石室ならびに先に説明を加えた2基の経塚から、おむね次の遺物が出土している。

Dからは小刀4・刀子3、経筒は鉄製1・銅製2、須恵器甕・須恵器片口などが確認されている。詳細な出土状況は不明なものの、2基以上の経塚が存在した可能性がある。須恵器甕と同片口の存在は、本資料が経筒外容器の可能性を示唆しているし、残されているメモ写真にもそうした状況が撮影されている。

Cからの遺物としては、鉄製経筒1と刀子3があった。またAには鉄製経筒2が埋納されており、いずれも倒れていた。Bには銅製経筒2が納入されていた。

まとめ いろいろな困難な状況のなかではあったが、発見直後に遺構や遺物の写真撮影をおこない、資料を残した香住町在住の味田晃氏に当時の写真を提供していただいた。経塚の調査例が多くないだけに貴重な資料である。伴出須恵器の年代観からすれば、これらの経塚の築造時期の一端が平安期から鎌倉期にかけてのころであることが判明する。

市域では、妙楽寺経塚のほかにも野上地区・高屋地区などで経塚の出土が知られているが、これらはほとんど不時発見のために詳細については不詳である。妙楽寺経塚のほかにも高屋経塚・野上経塚からは鉄製の経筒が出土しており、また、気比地区の太平寺経塚・同宝塚経塚などからは青銅製の経筒が検出されている。隣接の出石町や丹後地方での類例との比較検討が重要であろう。

5.13 妙楽寺出土仏具 妙楽寺字見手山



図206 妙楽寺仏具出土地位置図

契機 県立但馬文教府の設立に際して、連絡道路の工事中に大量の密教仏具が発見され、当時、地元の研究者らが必死に採集し、現在は文教府において一括保管されている遺物である。錫杖頭は市指定文化財。ときどき、経塚出土遺物と出土地などについて混同があるので、ここで簡単に説明を加えておこう。

立地 今となっては出土地を正確に特定することは困難だが、文教府への市街地側からの取り合い道路工事中の発見であるから、先に述べた古代～中世の大寺院としての妙楽寺にかかわる遺物とみておきたい。すなわち、巨視的には東を向いた山の斜面なり谷部分にあたる位置からの出土とみられる。

遺構 工事中の発見にかかるため、遺構や遺物の出土状況については不詳である。

遺物 遺物については、早く川勝政太郎氏の紹介や市教委で刊行した『但馬・妙楽寺遺跡群』に比較的詳しい紹介がなされている。ここでは、後者から引用しておく。

六器はすべて銅の铸造品で、形態的には数種類が認められる。したがって、一括出土（埋納）遺物の可能性は疑問視される。多くは碗と台皿で、他器種が2点ある。市指定文化財。

碗は、径10～11cm前後のものが多く、最大径を測る例で13.5cmであった。また、台皿と呼ばれる遺物は、皿部の径が10.8cm前後におおむね揃っている。これら以外は、宝珠鈕を有する蓋形の遺物、透かしを施した蓋のような資料も認められる。

一括出土かどうか不明ながら、これらとは別に大型の錫杖頭と宝珠杵も計測・図化されているので合わせて紹介する。錫杖頭は、長さ49.5cmと巨

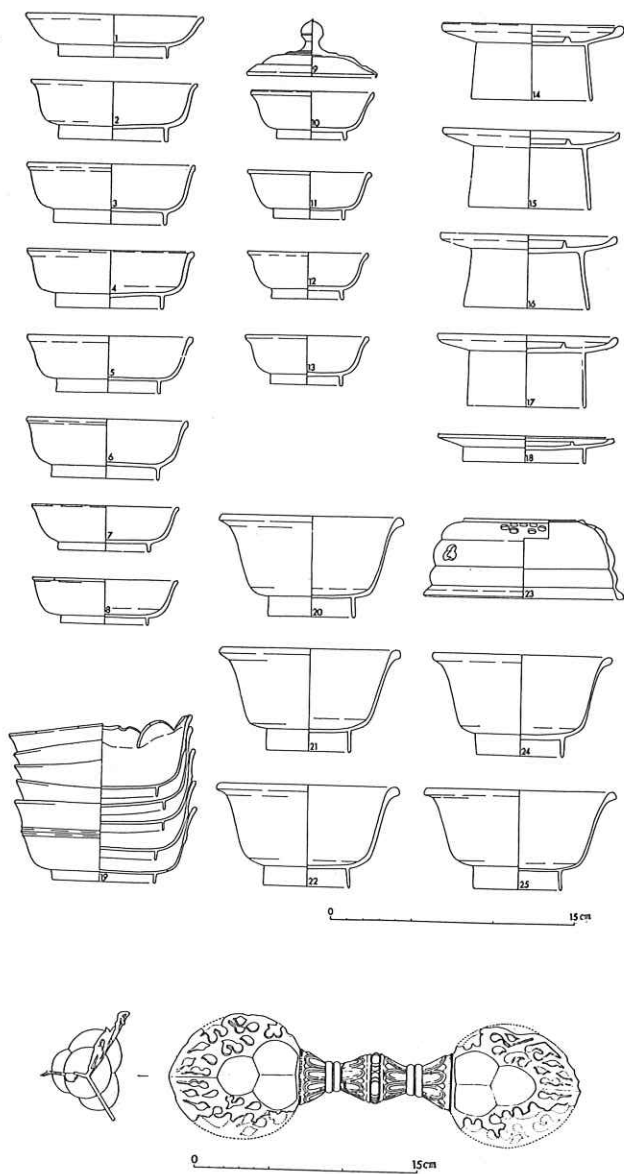


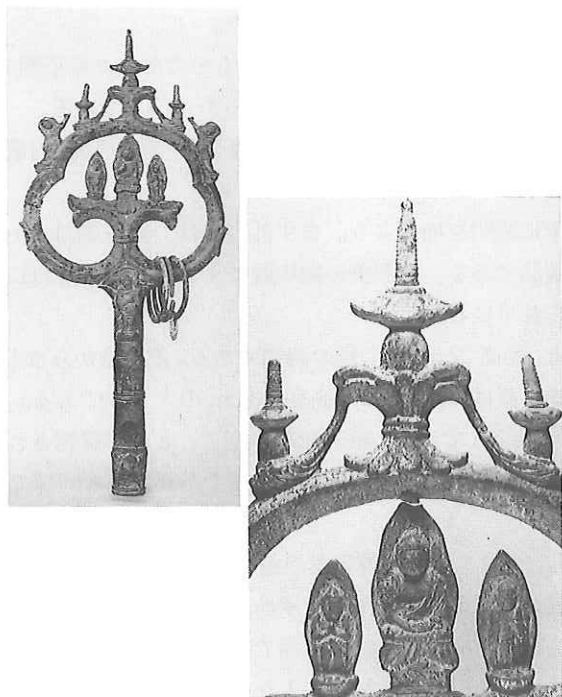
图207 妙楽寺出土仏具各種実測図

大な青銅製で、遊輪と三輪を残している。環は、宝珠形というより、三累環の趣である。環内には三尊仏を配置し、また環の上部中央とその左右には塔で装飾している。鎌倉～室町初期の所産とされる資料である。

宝珠杵と呼ばれる遺物は、全長 28 cm を測る青銅製品である。宝珠部分を火焰で飾っている。室町期に編年される遺物である。

まとめ これらの遺物は、前述したようにその出土状況がほとんど不明である。したがって、その埋納の意志も判断できない。しかしながら、こうした仏具類は、密教系寺院の法具として使用されていたものである。

出土地が、推定される古代～中世にかけての密教系寺院としての妙楽寺の寺地一帯であることから考え、建物建立の際の地鎮具として埋納されたものか、寺の法具として伝世されていたものが、旧寺の廃絶とともに地中に没したものであろうか。



写121 妙楽寺出土大錫杖頭

5.14 気比太平寺経塚 気比字太平寺

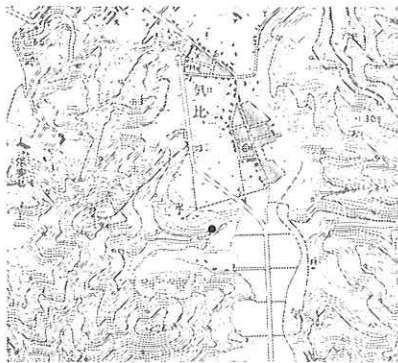


図208 気比太平寺経塚位置図

契機 太平寺経塚は、昭和53年に碎石採取のための発破の衝撃で発見されたものである。発見当時の状況は『豊岡市史』上巻に収載されているとおりであるが、詳細はやや不明瞭である。

立地 経塚の発見地は、標高約60mの東に派出する丘陵尾根上で、眺望の良好な立地である。その字名などから、付近にある現在の観正寺とも

関連が伝えられている寺跡伝承地であった。

遺構 遺構は、工事中の不時発見にかかるものであるため不明であるが、およそ3m四方を三段に栗石を積んだ塚だったと伝えている。

遺物 出土遺物は、外容器としての珠洲焼の壺・銅製経筒・内蔵されていた経巻8巻がある。

以下、簡単に説明を加えよう。まず外容器は、器高31.3cm・口径21cmを測る珠洲製品である。珠洲焼の編年観によると、おおむね13世紀前半の時期が与えられている。

銅製経筒は、器高22.6cmの銅の鋳物である。蓋と身からなり、やや小型の作りである。蓋は口径8.1cm・高さ2.3cmの大きさである。筒は、口径7.4cm・高さ20.7cmである。経巻は紙本経で、8巻が確認された。1巻のみが開巻可能な状態で、調査結果は法華経であり、他も同様であったと推定される。

まとめ 時期的には、珠洲製外容器の編年観から鎌倉時代後半とされている。出土位置から考えて、太平寺伝承地との関連が想定される経塚である。また、珠洲焼の発見例としては最も西であり、不明な点の多い中世段階における船を利用したであろう物資や人々の交渉・経済圏を理解するうえで貴重な資料である。

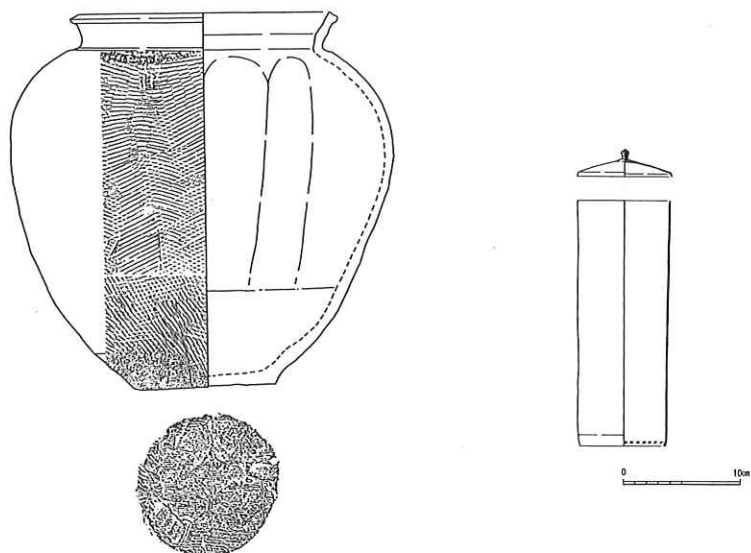
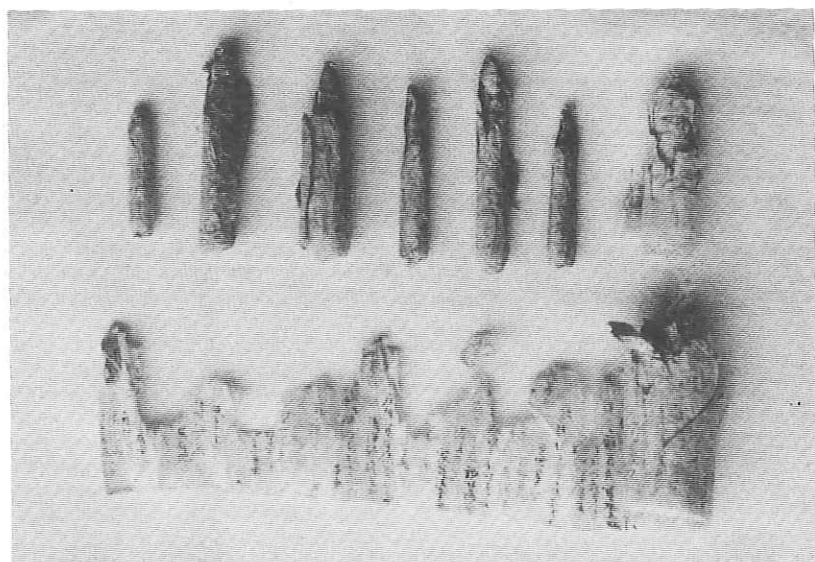


図209 気比太平寺経塚出土外容器・銅製経筒実測図



写122 気比太平寺経塚経筒内経巻

5.15 衣笠山のろし台址伝承地 河谷字穴谷、ほか



図210 衣笠山のろし台址伝承地位置図

契機 市内のテレビ難視聴の解消のために、当該地に NHK 中谷中継所の設置が決定したのは昭和48年のことである。以前から周知されていた遺跡であり、事前の確認調査が同年に実施されることとなった。

立地 遺跡は、豊岡盆地を一望できる絶好の地に立地する。神美方面・市街地・三江方面が見渡せ、戦略的

には重要な位置を占めていたことになろう。南は、鞍部を経て三開山に通じており、三開山城址との有機的な関連も当然考慮する必要がある。

遺構 急峻な山上の調査であり、必要最小限の調査にとどめた。すなわち、破壊される部分が限定的であり、表面観察によって遺構がはっきりした部分について、トレンチ調査を主体として実施した。

中心となるのは、まわりを削平して造成した長径 12 m・短径 8 m の台状遺構である。簡単な調査では、柱穴等の遺構は検出されていない。また、その北西裾部では、溝状の遺構がみつまっている。

遺物 本遺構に伴う遺物と考えられるものに灯明皿と釘があるが、具体的な時期について論及できる材料ではない。

まとめ 当該遺跡の性格は、その立地から考えれば伝えられる「のろし台」としての機能も可能性としては残るであろうが、調査では烽を上げるためにできる炭化物の残存など、遺構や遺物によって積極的に検証する資料は得られなかった。

遺跡の立地からすれば、周辺部の三開山城址や河谷城址などとともに城塞群を構成し、有機的関連をもたせていたものとみられる。調査の意義は、その結果よりもむしろ県下における早い時期の中世山城調査の端緒をつくったことであろう。

5.16 亀ヶ崎城址 福田・滝・森津

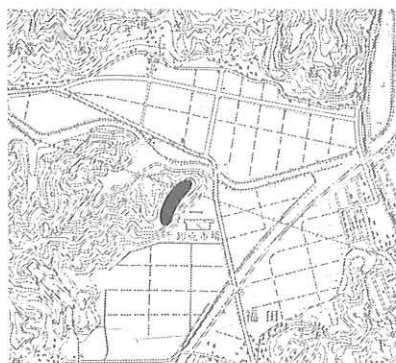


図211 亀ヶ崎城址位置図

契機 本遺跡調査の契機については、第2章および第3章で述べたとおりである。ここでは再論しない。

立地 砦址の本体が位置するのは、当該遺跡群のなかでも最も高い位置である。広い範囲でいえば東西110mあまりの尾根上が曲輪ということになるが、直接的には東西の堀切で区画された部分のみからなる郭である。

遺構 調査は、中心となる上記の郭を全面調査し、トレンチによる深掘りによって土層状況を明らかにしようとした。

主郭部分は、東西の2本と北側の浅く小さい1本の、3本の堀切によって囲まれた部分である。まず東の堀切は最大幅3.5m・深さは3m、西の場合は8mと3mと大きい。北側のものは、3m×7mの範囲に深さ1.5mあまりの溝であった。

主郭部の平坦地は、東西で31.5m、南北で15mの規模で、東側は旧表土のうえに60cmあまりの盛土がなされている。部分的に土塁が確認できるが、残存状況は不良である。

建物遺構が、弥生期の竪穴住居址と重なって1棟と、西側の堀切近くで柱穴様の遺構が認められている。まず中心部の遺構は、柱穴等に若干のバラツキはあるものの2間×3間の規模で、広さとしては3.9m×5mの範囲であった。

また堀切近くに、しっかりと掘り込まれた柱穴らしい遺構があったが、こういった建物が復元されるか不明である。

遺物 砦址に伴うとみられる遺物は、灯明皿が1点あるのみである。器高は2.5cm・口径10.1cm程度である。

まとめ 遺物がすくないために、当該遺構の時期を特定することはかなり

困難である。しかし、弥生時代中期の高地性住居が立地することからもわかるように、当地が絶好の要害地であり、戦略的には重要な位置であったことは否定できない。隣接する海老手城址が主たるもので、これの見張り場の色彩の強い遺跡と理解することができようか。

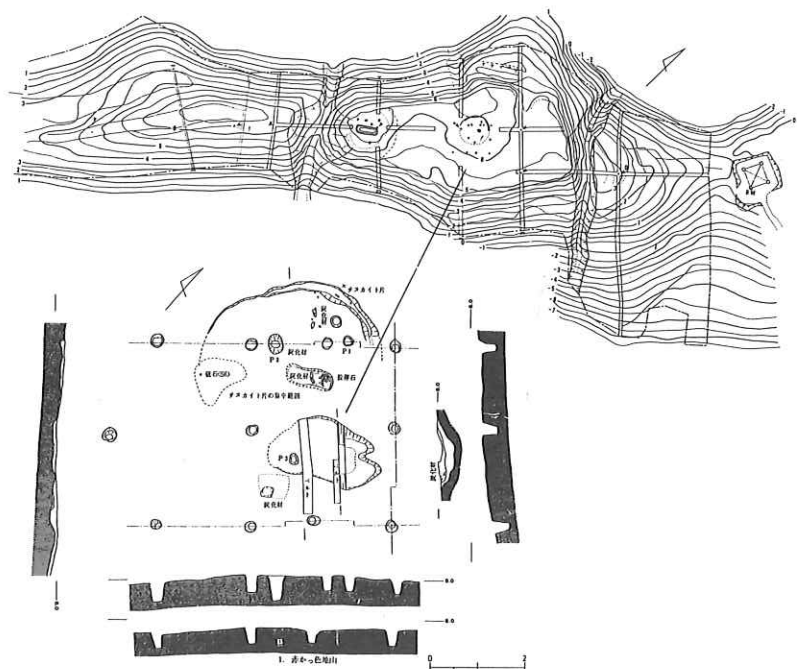


図212 亀ヶ崎城址全体図と検出された遺構

5.17 日撫備後衆山砦址 日撫字シャキガハナ、ほか

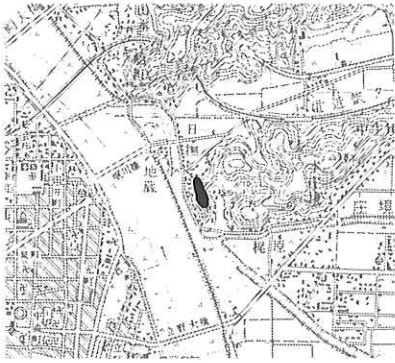


図213 日撫備後衆山砦址位置図

契機 建設省豊岡工事事務所では、一級河川円山川下流の治水事業を精力的に進めてきているが、調査は、日撫地区の正福寺を移転して六方川の最下流部分を拡幅し、かつ道路を整備しようという工事に先だって移転先の候補地のひとつである当該地につき、昭和61年に調査を実施した。

立地 遺跡は豊岡市の円山川右岸に位置し、豊岡市市街地から比較的近い位置にあり、JR山陰線の豊岡駅から北東へおよそ2.3 kmの所にあたる。

遺跡が立地するのは、三江谷を分断する形の丘陵状地形の上であり、その西の突端部に位置している。標高はおよそ20～50 m程度の低丘陵地であるが、砦築造のころには前面の円山川・六方川などを利用した要害の地であったと推定される。

遺構 調査は工事にかかる部分に限定したため、曲輪北側部分は調査をおこなわなかった。南北・東西両方向に一本ずつベルトを設定して調査を進めたが、土塁には構築方法の調査のために2か所のトレンチを設定した。

主郭曲輪部分の規模は、現存部分で東西方向に0.5 m・南北方向に25 mである。南北方向は、本来これ以上に大きくなることはないと思われる。

平坦部は、緑黄色砂質土が中央付近で20～20数cm堆積していた。これは、土塁を築くのに使用された土の一部が流失、堆積したものと思われる。

土塁以外の遺構としては、列石が堀切から1.5 m内側で、堀切に平行すなわち東西方向に検出された。列石は21石からなり、東から3石目と5石目の間だけが2段に積まれている以外は1段であった。列石の性格は、堀切側にも土塁が存在した可能性があり、その基礎部分のおさえ石としての性格が付与されることも可能であろう。

「橋がかり」状遺構は、副郭の北東隅部分が堀切に突出している状態が認

められたが、主郭部側については主郭南隅斜面部でコンターラインがやや粗になる程度であった。

遺物 備後衆山砦の調査で出土した遺物の点数は、総数320点におよぶ。土器・陶磁器のほか銅銭・銅製品・鉄製品などがある。かならずしも、砦址の時期に一致するものとは考えにくい遺物が大半である。

まとめ 備後衆山砦は、主郭を中心に南と北東に副郭が続いている。砦の曲輪配置は、主郭を中心に曲輪がつながる連郭式に分類される。

備後衆山砦の歴史的性格は、砦の北700mにそびえる愛宕山（標高107m）の山上に築かれた但馬地区での有数の山城である鶴城との関連及び但馬守護山名氏が但馬での拠点を九日市（現・豊岡市九日市）に置き、かつ備後国の守護でもあったこととの関連でとらえなくてはならない。戦略的にも円山川下流域への咽喉部を押さえ、舟運とは重要な関連をもって構築されたであろうことは間違いあるまい。

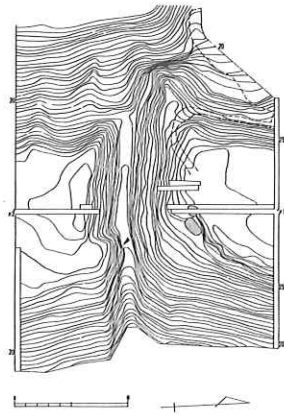


図214 日撫備後衆山砦址“橋がかり”状遺構実測図



写123 日撫備後衆山砦址の検出された主郭

5.18 駄坂舟隠遺跡群（下鉢山城址） 駄坂字舟隠

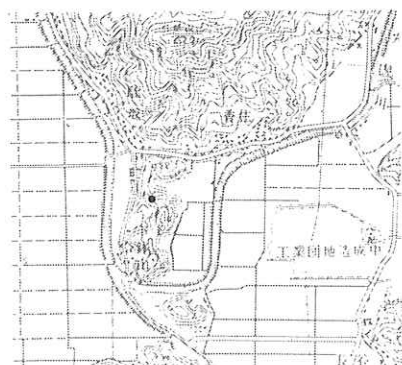


図215 駄坂舟隠遺跡群位置図

契機 調査の契機は、第2章でみたように民間の宅地開発事業にかかわるものであった。再論しない。

立地 曲輪は、2号墳の西に延びる尾根稜線の南半分をL字型にカットし、一部斜面部分に土をもちだして造成されている。そうして造られた平坦部は、規模東西18.5m・南北14mを測るが、やや広くみると東西23mになる。

曲輪からの視界を考えると、東側は2号墳のある尾根のため視界がきかない。北側は稜線が壁として残り、高い場所では3m近いレベル差がある。南側は急斜面で狭い谷になり、谷をはさんだ南側の尾根は高く視界がきかない。ただ、西側にのみ視界が開いている。

遺構 調査の性格から、当初はトレンチによる確認調査のみを予定していたが、遺構が検出されたため全面調査に移行した。

曲輪から、中央部で約50穴のピットが検出された。ピットは、大部分が円形、長方形である。そのいくつかは切り合っているが、平均すると径40cm前後で地山に深く掘られている。

ピットの並び方・規模などを検討すると、東西6間・南北3間の総柱建物が復元できる。ただし、東西方向南端柱列は、他の柱列に比較して南北方向の通りが悪く、東端の柱穴とするにはやや不確定要素が残る。柱間には若干のバラつきがあるが8尺前後である。

遺物 表土はぎ作業および遺構検出中に、平坦部堆積土中から白磁碗・壺・土師質小皿・甕・すり鉢の破片等が出土した。

土師器甕は、円形に掘り込まれた土壌内より出土した。上半分がすでに失われていたが、内部から玉砂利・土師質小皿16枚が出土した。小皿は数枚単位に重ねられ、砂利と交互に入れられていた。地鎮祭に伴う遺構・遺

物の可能性が強い。

白磁は、建物の東端近くで地山に伏せた状態で出土したが、建物との直接的な関係は不明である。

まとめ 曲輪を調査した結果、下鉢山城の北端の曲輪のひとつと考えられ、稜線の南半分をカットして造成されている。曲輪中央に、6間×3間の総柱建物を建てる。若干の遺物からすれば、本遺跡の当初の性格は、中世山城ではなく、平安時代後期ころの鉢山寺との関連を考慮すべきかも知れない。

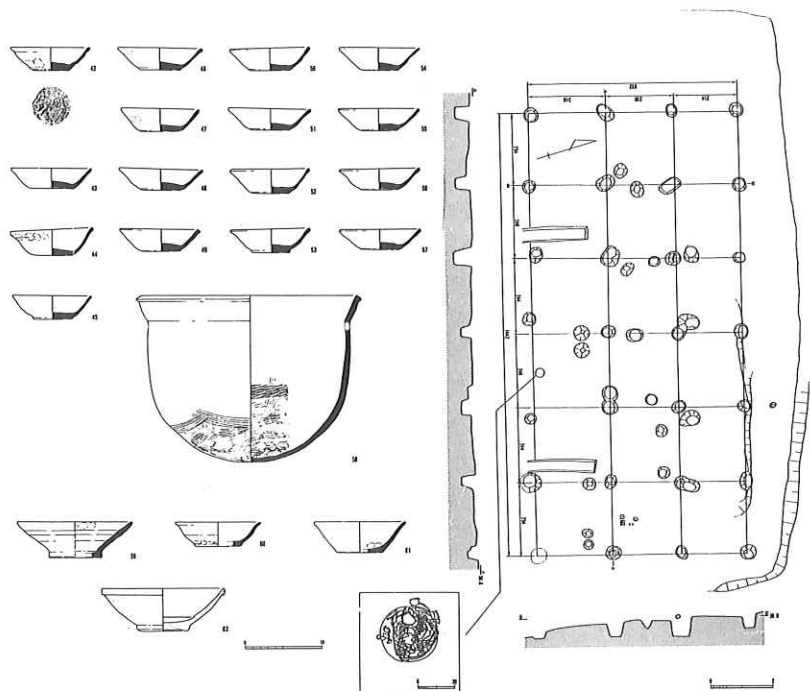


図216 駄坂舟隠遺跡群検出遺構と遺物実測図

5.19 尼城址 岩井字本井



図217 尼城址位置図

契機 発掘調査の契機については、第2章で述べた通りである。広域行政によるゴミ処理場の建設工事に伴い、弥生期の墳墓や古墳とともに調査された。調査は、昭和61年に実施した。

発掘調査によると、きわめて多数の柱穴などが検出され、当地点に建物が建てられていたことは確かである。

立地 尼城址は、尾根先端から約100m奥の稜線を水平に数段に削平して曲輪を造っている。全体的には東西160mの間に西から順に曲輪が連なっている。東は、本枝尾根が山塊に取り付く場所で、これより東は急斜面で自然地形に移行している。

遺構 調査は、確認調査を経た後、丘陵尾根全体にわたって全面調査をおこない、多くの遺構が検出された。以下、曲輪の構成を主に説明を加えよう。



写124 尼城址全景

二重の堀切で切断しながら続く主郭は、長辺方向約 31 m・短辺方向約 20 m のやや不整形な長方形を呈している。東隅部分で若干の盛土の状況がみられるが、平坦部の大部分は地山の削平によって造成されたものである。東端には副郭 1 が位置し、その間は高低差 3 m の崖状地形となっている。

主郭を調査した結果、全体の中でもっとも防御的にすぐれていること、中心的位置を占めること、建物は 11 棟復元されるが、いくつかは重複しており、何度かの建替えがおこなわれたこと、一時的施設ではなく、ある程度長期にわたって使われていたものと思われることなどが判明した。

次に副郭については、副郭 1 が主郭の東側の標高 30.5 m に位置し、南北に細長く狭い曲輪である。その東側に副郭 2 が続いている。ここは、ほぼ東西方向に長く広い曲輪である。遺構としての堀 3 と重複している。南の谷側は多少の出入りがあるが、全体的にみると直線的であり、斜面は急傾斜である。水田面との比高は西端で約 10 m、東端では 4 m である。

本曲輪からは、きわめて多数のピットと、土壇・堀が検出された。多数のピットから 27 棟の建物・9 列の柵が復元された。主郭の建物より規模の大きい建物が多い傾向が認められた。

曲輪の中央部に、曲輪主軸に直交する南北方向の堀 3 本を掘っている。堀は切り合っているが、曲輪は堀によって東西に分けられていたと思われ



写125 尼城址副郭 2 検出遺構全景

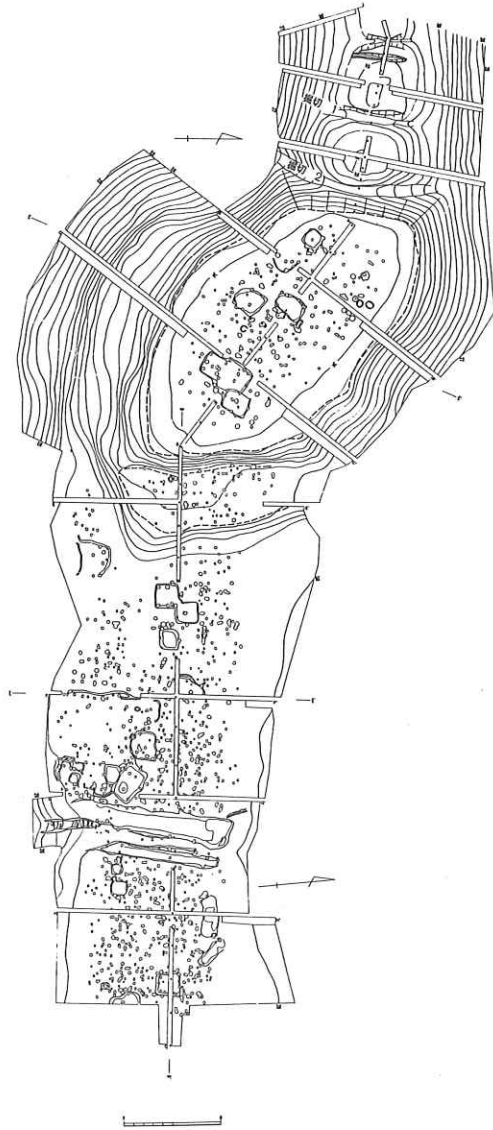


図218 尼城址検出遺構全体平面図

る。

遺物 遺物は、広い範囲から多数検出されている。しかし、かならずしも良好な状態で出土しておらず、一定の見通しを示す程度のものである。それによると、室町期から戦国期にかけての遺物が散見するものの、江戸期のものが大半を占めており、遺跡が長期にわたり利用されていたことを示唆している。

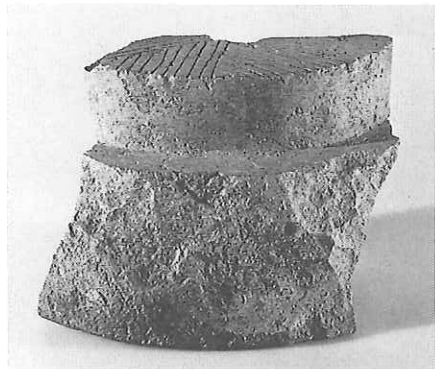
比較的珍しい遺物として、ここでは石臼のみを取り上げておく。石臼は一部分のみの出土であったが、石英安山岩質の凝灰岩を利用したもので、10条単位の刻み目が施されている。復元最大径は、約30cmを測る。

まとめ 尼城は、基本的には低い立地・広い削平地・遺物などからみて室町時代末から戦国時代の山城と思われる。主郭を西側の比較的高所に築き、ほぼ東西に各曲輪を配置する縄張りである。

尼城は尾根稜線に立地し、二重の堀切などの曲輪配置から山城とすることができる。また、建物などの遺構からは、館としての機能も考えなければならない。

以上のことを総合的に判断すると、山城と館の中間的な形態、すなわち、いわゆる“館城”として尼城を位置づけることが適当と考える。

明治初期の文献にある“池田屋敷”との伝承は、そのあたりの事情を示すものであろうか。



写126 尼城址出土石臼

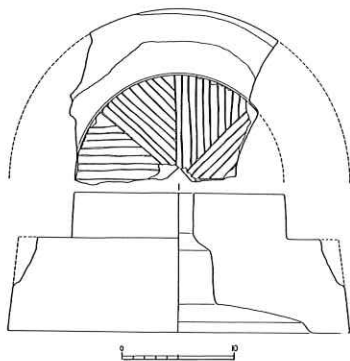


図219 同実測図

5.20 高屋窯址 高屋字岩屋

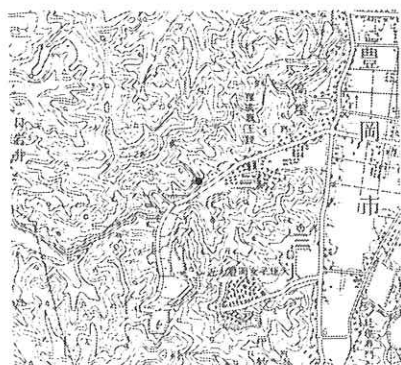


図220 高屋窯址位置図

契機 高屋地区に、江戸期の磁器窯である高屋古窯が所在し、地主方に名品が保管されていることはよく知られていた。天井部が崩落し、露出したままの窯址は、風雪に耐えてきたというものの、次第に自然崩壊への道をたどっていることは確実であった。

市教育委員会としては現状での確認調査を実施し、適切な保存策を考

えることとした。国庫補助金を得て、昭和53年度事業として実施したもので、昭和54年2月におこなったものである。

立地 窯址は、南に面した山裾の斜面に立地している。

遺構 調査は、残存し露出していた窯体の全容を明らかにすることが目的であり、かつ調査による破壊を最小限にとどめることを主眼に実施した。大量の窯道具が出土したが、一部は検出状況のまま砂を入れて埋め戻した。

そうした考えから、周辺調査については窯体西側の排水を目的とした堀割の存在が明らかになった程度である。

窯址は、現状では単独に1基が存在する。南に面した山裾の傾斜地を削平整地して段状の地形を造り、レンガを用いて構築した連房式登窯で、その焚口および第1房が破壊されて



写127 高屋窯址第2房窯道具の状況

いるものの、他の房は比較的良好な残存状態であった。

窯址は、水平距離で全長で17.2 m、高低差は3.75 mであり、勾配は約15°あまりであった。それぞれの房の規模は、次のとおりである。奥壁部の最大値で表現すると、第2房は5.3 m×2.42 m、第3房は5.90 m×2.43 m、第4房は6.58 m×2.84 m、第5房は7 m×3.05 mであった。

遺物 窯址に伴う遺物量は、大量の窯道具以外では多くない。第2房では、製品の窯詰状態が分かる道具類の配置が認められ、一定の成果があった。図に示したとおりである。



写128 高屋窯址全景

個々の遺物について詳論はしないが、圧倒的に染めつけ磁器類が多い。とっくり・茶碗・湯呑・線香立・鉢・紅盃などがあり、とりわけ京都祇園の紅屋高嶋屋の特注品である紅盃などは注目される。

まとめ 高屋焼については、発掘調査の成果とは別に文献等による研究が進められており、いくつかの成果があがってきている。すなわち、ひとつは創業時期の問題であるが、記念の製品の出現によって「天保年」が、また本井家文書によって「天保元年冬陶器山開」が、さらに鳥井家日記の天保2年4月6日条に「高屋村唐津山見物」とあることなどが判明しており、天保元年の開窯には疑いがない。

廃窯は、資料に若干の混乱はあるものの、「天保の飢饉」や窯元の火災が直接的・間接的な要因となったようである。